

モジュール型教材の可能性：
中級日本語会話教科書の開発プロジェクト
実践報告（2018 年）

高屋敷 真人
宮内 俊慈

要旨

本稿は、関西外国語大学留学生別科の日本語会話レベル 6（中級後期）の教科書開発プロジェクトとして作成された「モジュール型教材」を改訂し、2017 年度秋学期と 2018 年春学期の日本語コースにおいて試用するまでの実践報告である。この教科書開発は、2014 年度に本学国際文化研究所（以下、IRI）の共同プロジェクトに採択されて以来、過去 4 年間に渡り継続して行われており、改訂を行った課は、留学生へのアンケート調査の結果、高評価を得ている。

【キーワード】 中級日本語会話、自律的学習、学習者主体、モジュール型教材、接触場面

1. はじめに：理論と背景

関西外国語大学留学生別科では、2008 年秋学期（9 月～12 月）より中級後期日本語クラス（日本語 6: Japanese 6、以下、JPN6）のメインテキストとして、モジュール型教材の開発プロジェクトが新たに始まり、それ以降、毎学期、新しい教科書の試用と試用教材についての留学生へのアンケート調査が続けられている。このプロジェクトは、2014 年、IRI の共同研究にも採択され、それ以後 4 年間、学生へのアンケートの調査結果を分析し、それに基づき、教材の改訂も続けられている。本論は、2014 年から 4 年間に渡る教材開発の概要とアンケート調査の実施、アンケートの分析結果等についての報告である。

JPN6 は、中級後期のレベルに該当し、本学の日本語コースで言うと、初級レベル (JPN1 ~ JPN4 : 初級テキスト『げんき I』、『げんき II』使用) を 4 学期で終え、中級前期レベルで 1 学期間 (JPN5 : 90 分授業を週 3 回で 5 週間) の学習歴がある学生が対象である。学生の学習歴は、勿論、世界各国それぞれの機関によって異なるが、1 年半から 2 年半で初中級レベルの日本語コースを終えて来た学習者が多く見られる。コースの目的は、日本語能力試験 N2 レベルに合格するための日本語能力の養成である。

昨今、具体的データに基づいた複数の異なるアプローチによって初中級の文法シラバスを作成し、今後の文法シラバスを再考していく試み (庵・山内 2015) が進められ、一定の成果を上げている。また、既存の日本語教育の文法シラバスが、初級では「シンタクスに関わる狭義の文法」を扱い、中上級では「複合辞を中心とする機能語の学習」になってしまっているとの指摘もある。(小林 2009:40-41) こうした文法シラバスの在り方に対して、「学習者の多様化に対応する文法」あるいは、「日本語学に依拠しない」、「日本語学習者が日本語でコミュニケーションする時に必要な文法」への見直しの必要性 (野田 2005:1-2) が説かれ、日本語学習者のコミュニケーション能力を真に育成するためのやり方に変えていくためには、「言語学的な研究から出発し、その論理で教育内容を決めるというやり方をやめ」、「日本語を使う譲許から出発し、その状況でどんな能力が必要かを考えて教育内容を決めるようにしなければならない」のではないかという指摘がなされている。(野田 2005/2012:4) 具体例としては、庵の提唱する初級レベルでの「やさしい日本語」(庵 2009)、山内の「初級文法シラバス」(山内 2009)、田中の「初級総合教科書から見た文法シラバス」(田中 2015『データに基づく文法シラバス』)、「出現頻度から見た文法シラバス」(岩田・小西 2015『データに基づく文法シラバス』) など、体系的で網羅的な文法シラバスの見直しと新しい文法シラバスの提案がなされている。先行研究では、全てのレベルを通じて、主として、「名大会話コーパス」、「朝日新聞データベース」「新書コーパス」「BCCWJ (現代日本語書き言葉均衡コーパス)」などコーパスを中心に分析されたものが多く、それ以外では、初級に特化したものとして、田中によって初級総合日本語教科書の準全数調査が行われ、「初級総合教科書から見た文法シラバス」(田中 2015) が発表されている。

2008 年に本プロジェクトを始めてから、新しい中級教材開発を始める際のシラバ

ス調査は、中上級レベルでは、コーパス分析が中心で、それ以外は殆ど行われていないことに直面して来た。教材、特に会話教材については、大規模な調査も行われておらず、現実には大学レベルでの中級日本語学習者（留学生）がどのような接触場面での日本語を必要としているのかも明らかになっていない。

本研究で、欧米系を中心とした日本語中級学習者に教材（教科書）についてのアンケート調査を行うことで、実際の学習者の視点から見た文法シラバス（劉 2015:147-165）、学習者が必要とする実生活における教室外のコミュニケーション活動（接触場面）との関連、あるいは、主に日本語能力試験 N1、N2 レベルでの構文や語彙（森 2015:193-215）との重なり具合などを更に調査するために必要な基盤データにもなるのではないかと期待している。本研究では、更に、教育対象者の学習目的とニーズ、それらに伴う日本語教育実践者の言語教育における基本理念や教授法についても再考する端緒になればと考えている。

本研究では、上述したような状況を鑑み、より地域的、現実的なコミュニケーション場面〔接触場面〕での日本語学習者の興味・関心・ニーズを重視し、学習者の要望に対応する教材の開発を基本理念とする。その際、「接触場面」（ネウストプニー 1995:186-206）や「モジュール型教材」（岡崎 1989:34）という教育理念に則り、実際に学習者が自分の日常で遭遇するような実践的な場面にこだわり、教室内と教室外の言語活動が乖離しないように配慮した。市販教科書は、幅広い学習者や教育機関の使用を可能にするために汎用性を持たせる必要がある。それゆえ、没個性化・没個別化が避けられず、どの学習者にとっても最適とは言えない教科書になってしまうという点も含有している。そのような問題点に対しては、今後の教科書開発において、やはり、学習者がどのような接触場面でどのような日本人と会話を交わすのかを常に明確にした上での教材開発が不可欠ではないかと思われる。その上で、学習者と日本社会や地域社会との密接な関わり合いを出来得る限り教材に反映していくことが出来ればと考えている。（高屋敷 2012）

具体的には、本研究の調査、分析結果を基に、異なる背景や動機を持ち、大変な速度で多様化、変容する個々の学習者のニーズをどのように教材に盛り込んでいけるのかについて考え、その結果を今後のシラバスにいかん反映させ、それを実際の教室活動として、どのように教科書に盛り込んでいくかについて考えていきたい。（高屋敷 2012 他） 本研究の結果を分析することが、将来、「学習者主体」の「自

律的」な教室活動を促すような日本語教育、日々流動変化していく学習者のニーズに応え得る教育の実現へ向けた研究活動の基盤になればと願っている。

詳しい経緯については、「モジュール型教材による中級後期日本語教科書開発プロジェクト」（高屋敷 2012:119-133）、あるいは、「モジュール型教材を利用した中級日本語会話練習―教室内外の言語活動の統合に向けて―」（高屋敷 2013:131-146）にまとめてあるので、ここでは割愛する。

2.1. 中級用教材としてのモジュール型教材の利点

モジュール型教材とは「教科書のように特定の順序に沿って一つ一つの課を学習するタイプの教材とは違い、学習者が既に学習し終わっている項目から一定程度独立して使えるようにした教材」である。（岡崎 1989:34）つまり、「通常の教科書が順序を無視して使うのが難しいのに対して、学習者のニーズが新たに生じたその時点においてそのニーズに合わせた形の活動を実施するような使い方を可能」（岡崎 1989:34-35）にさせるものである。日本語の中上級レベルにおいては、学習項目（文型）は提出順序を積み上げていく必要がなく、教材がモジュール型の構造を取っていれば、常に変化流動する学習者のニーズに柔軟に対応でき、情勢の変化に伴う学習者のニーズが新たに生じた時点で古くなった箇所のみ簡単に差し替えが可能となる。そうした観点から、本プロジェクトでは、中級教材でこそモジュール型教材の特性が最大限に活かせるものと考え、モジュール型の教科書を作成することに決定した。

2.2. モジュール型教材の利点を活かした教科書の改訂例

2008年：2008年、新教科書を使用し始めた直後、リーマン・ショックによる金融危機の影響で、ユニット6のトピックである「急増する外国人労働者」という本文がすぐに時代に合わないものになったため、2009年春学期は、ユニット6の本文の内容をフィリピンやインドネシアからの看護師や介護士の就労問題に焦点を当てたものにし、「外国人労働者、受け入れますか？」というタイトルに合わせて書き換え、差し替えた。

2008年～2013年：2008年度の新教科書のユニット1は、当時、日本の学生の間で人気のあったSNSのMixiを日本人学生が留学生に紹介するという場面で、「Mixi、

やってる？」というユニット名で執筆された。しかし、2009年以降、クシィの登録の仕方が招待制から誰でもすぐに登録できるように変更されたり、誰が自分のページを見に来たかが即座にわかる「足跡」機能がなくなったりというような変更が行われた。その都度、ユニットの本文の該当箇所のみをすぐに差し替えることができた。これは、1冊のまとまった教科書を買わせるという体裁ではなく、ユニットごとにプリントとして配布する「モジュール型教材」であったからこそ可能であったのではないと思う。このように「モジュール型教材」は、学生のニーズや国内のみならず世界の文化事情、社会時事や流行の急激な移り変わりにも柔軟に対応できる可能性を秘めた教材である。

2014年: ユニット1の本文のトピックを Mixi から LINE に改訂する作業を行った。詳しい調査内容と結果報告については、「モジュール型中級後期教科書の学生による評価」(宮内 2015:49-69)を参照していただければ幸いである。

2015年: ユニット6「外国人労働者、受け入れますか？」は、少子化に伴う日本の労働力不足を補う策としての外国人労働者の受け入れ問題を扱っており、世界各国の移民の労働問題、あるいは、ブラジル日系人の肉体労働の問題、フィリピンやインドネシアからの看護師、介護士の受け入れ問題など、様々な議論が期待できる良いトピックであったが、留学生の日常とは少々かけ離れている内容であったため、留学生の反応が悪かった。そこで、より本学留学生の興味関心に沿うものとして、日本の就職活動事情と外国人留学生の日本での就職活動について新たに「就活って何？」というタイトルのもと本文を書き直した。詳細については、モジュール型中級後期教科書の学生による評価(2)」(宮内 2016:25-54)を参照していただきたい。

2016年: ユニット4「ユニクロ、MUJIは海外で成功するか？」を取り止め、「和食」「日本食」に関するトピックに変更することに決定した。「ユニクロ」のトピックを廃止すると、全6ユニットの中で、ビジネス分野に関する話題がなくなってしまうので、ユニット全体のバランスを考え、「和食」に関するビジネス関連の話題になるように考慮した。その結果、「ユニクロ」の世界進出は成功したかという話題に代わるものとして、世界的な和食ブームを背景とした日本の外食産業の世界進出は成功しているかという内容で本文を書き換えた。この時の調査による教科書全体について、いい教科書であったかどうかについての評価は、“strongly agree”と“somewhat agree”を合わせると、100%の学生、つまり、20名中全員が「良い」と

いう評価で、“neutral”の回答も一人もなく、JPN6の教科書がかなりの好意を持って評価されていることがわかった。この時に入れ替えたユニット4に対する評価は、「面白い」とした学生が20名中14名(70%)で、「面白くない」とした学生はゼロであった。留学生が「日本食」に関して強い関心を持っていることが窺える結果となった。

3. 2016年度アンケート調査結果からの問題点と2017年度の改訂作業

2016年度のアンケート調査においては、ユニット5について「内容がいい」の評価が10名(50%)で「良くない」が1名(5%)という結果で、他のユニットと比べて低い評価となっていた。このユニットについては、「面白さ」の評価についても全ユニット中最下位で、学生間における関心の低さが見られた。タイトルは「インターネットは人類を幸せにしたか？」で、「インターネットで確かに生活は便利になったが、果たして人々を幸福にしてくれたのか」というテーマを扱ったユニットである。昨今の大学生にとっては、もはやインターネットは特別なことではなく生活の一部である。従って、今更その存在に疑問を感じることはなく、存在していて当然のものとなっているのかもしれない。

また、この時の調査において、今後取り上げて欲しいトピックの中には、日本文化に対するコメントが散見された。“something connected to culture”、“the topics related to Japanese culture and society”、“Traditional culture”、“Japanese traditions seen today in daily life like Giri, Amae, Senpai-Kouhai”といったものがその具体的なものである。また、旅行に関する関心も根強く高く、“Japanese tourist attractions, hidden treasures”や“Famous Japanese places”、“Traveling”、“Geography, for example, Hokkaido and Okinawa”といったコメントが見られた。これらの調査結果を踏まえ、学生が関西圏の文化、特に関西弁に興味を持っていることなども考慮し、2017年度は、ユニット5の変更が決定され、夏季休暇中に「インターネットは人類を幸せにしたか？」から「関西は好きですか？」へトピックの変更を行い、ユニット5の本文差し替え作業を開始した。本文の内容は、関西弁、昨今の外国人観光客の増加、道頓堀や黒門市場など大阪の人気観光スポットなどについて留学生と関西出身の日本人大学生が話すという場面設定にし、ユニット全体の改訂も行った。以下、2017年度の新ユニット「関西は好きですか？」を含めた2017年度秋学期終了時のJPN6

の教科書に対する評価の調査結果と分析を報告したい。

4. 2017 年度秋学期の変更内容

図 1 と図 2 が実際の JPN6 のユニット 5 の本文ダイアログの抜粋である。図 1 が改訂前の「インターネットは人類を幸せにしたか？」の本文ダイアログの「会話 2」の部分であり、図 2 が改定後の「関西は好きですか？」の同じく「会話 2」の部分である。

改定前のダイアログでは、ホストファーザーが、「e-メールやインターネットがなかった時代が懐かしい」と言っている場面や、監視社会、管理社会化現象の進行を嘆くホストファーザーのコメントが見られる。一方、改定後のダイアログでは、関西出身の学生「ひろし」が登場し、標準語と関西弁の違い、関西と関東の文化、習慣の違いについて語っている場面が見られる。

図 1 改訂前の本文ダイアログの一部（「インターネットは人類を幸せにしたか？」）

会話 2	
父	ああ、e-メールやインターネットがなかった時代が懐かしいよ。ほんの 15 年前は、こんなふうじゃなかったんだがなあ…。
アン	じゃあ、お父さんは、インターネットには、弊害があると思っているんですね。
父	そうだねえ、最近では、仕事のメールでも読んだら、すぐ返信することが暗黙の了解になっているんだ。3 時間後に送るときは、「返信が遅くなり申し訳ありません」と書くことが当たり前になっているよ。
アン	そうですか。私も日本人の友達にメールのレスが遅いって、文句、言われたことあるけど…。
父	メールによって、いつも仕事をしているかどうか監視されているような気持ちが出て、嫌になるよ。だから、インターネットが普及して、ますます管理社会化が進んでいるように思うよ。
アン	わかりました。お父さん、私、今度の日本事情のクラスで、この問題について、みんなとディスカッションしてみます。



図2 改訂後の本文ダイアログの一部（「関西は好きですか？」）

会話2
ジョン：面白いなあ。関西と関東って、言葉だけじゃなくて文化も違うんだね。
アン：へえー、面白そう。ね、ひろし君、例えば、どんな違いがあるの？
ひろし：せやなあ。例えば、関東では、大学の「一年生」やろ？ 大阪では、「一回生」って言うねん。それから、マクドナルドは、何て呼んでる？
まり：「マック」？
ひろし：関西では、「マクド」って言うねん。
アン：まじで？ あ、そういえば、私、大阪に行った時、エスカレーターの乗り方が逆だったよ。
けん：そうなんだ？ 東京では、左側に乗って、右を空けるのがマナーだけけど…。
ひろし：関西は、逆やねん。
まり：そうそう。それから、関西と関東のカップめんは、味付けが違ってるって知ってた？ 東京の方がしょう油の味が濃くて、関西の方が薄味なんだって。
ひろし：当たり前や！ 関西は、おだしの文化やで。
アン：面白い！ 私、今度の日本事情のクラスで、関西の観光について発表するから、参考にするね。

5. 2017年度秋学期のアンケート調査の結果と今後の展望

それでは、変更後の教科書に対する学生のアンケートの結果について見てみよう。

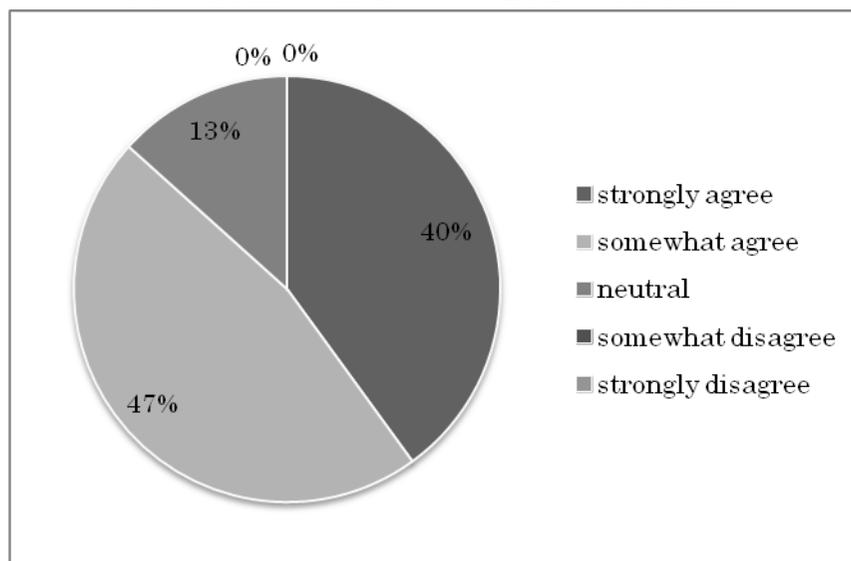
今回の調査の対象となった学生は2017年秋学期（9月～12月）のJPN6の全学生である。アンケートは、学期がほぼ終了する11月に授業時間の終わりの15分程度を利用して実施した。この学期のJPN6の学生は16名（男子：5名、女：11名）おり、欠席者を除く15名からデータを収集した。なお、アンケートは無記名で実施し、出身国の記述も依頼しなかったため参加した学生の出身国のデータは不明である。

調査は、以前の調査（宮内 2015 他）と同じく、教科書全体に対する質問（3問）と各ユニットに対する評価（14問 x 6ユニット = 72問）があり、全87問であった。全体的な質問としては、「教科書（Packets）は全体的にいいと思う」かどうか、今後「取り上げて欲しいトピック」は何か、さらに、JPN6の教科書に対する「Free Comment」を求め、ユニット毎の項目としては、取り上げられている「トピックは面白いと思う」かどうか、ダイアログの内容、長さ、難しさ、語彙の多さ、難しさ、練習内容、表現説明の内容、聞き取り練習の内容についてどう思うかなど14項目に渡って詳細に尋ねた。全項目に対する結果、分析については当紀要の別稿（宮内 forthcoming）で述べることにし、ここではこれらの調査項目の内、教科書全体に対する評価とユニット毎の評価の中で、ダイアログに対する「面白さ」と「内容の良さ」についての評価に限って報告する。

教科書全体に対する感想の結果が図3である。質問の「The packets of JPN6 are good as a whole.」に対して、“strongly agree”, “somewhat agree”, “neutral”, “disagree”, “strong disagree” の5段階で答えるものである。これを見ると、“strongly agree”と“somewhat agree”を合わせて87%の学生、つまり、回答者15名中13名が「良い」という評価であった。また、「まあまあ」の評価と考えられる“neutral”の回答は2名いたが、“disagree”および“strong disagree”などのマイナス評価をする学生は1名もいなかった。この結果から、JPN6の教科書(Packets)が多くの学生に好意を持って受け入れられているということがわかる。これは、今回の調査に限ったことではなくこれまで継続されてきたアンケート調査全てにおいて同様の結果が得られており(宮内2015 他)、JPN6のPacketsが全般的には学生間で評判のよい教科書であると言って良いであろう。

次に、それぞれのトピックの「面白さ」についてユニット間の比較をしたグラフが図4である。質問は、「トピックはおもしろいと思う(The topic is interesting)」に対して、先程と同様に5段階で答えたものである。このグラフでは、“strongly agree”と“somewhat agree”を合わせて“agree”とし、“strongly disagree”と“somewhat disagree”を合わせて“disagree”としている。

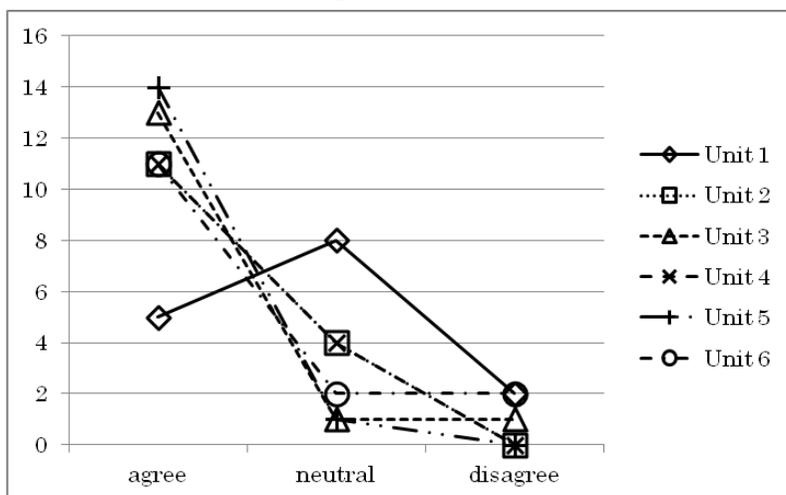
図3 「教科書は全体的にいいと思う」に対する賛否



このグラフを見ると、全てのユニットにおいて“agree”が“disagree”を上回っ

ているということが分かる。つまり、6つのトピック全てに対して学生が興味を持っているということが言える。しかしながら、ユニット1ではその差が小さくなっており、さらに、“neutral”の回答数が8名（53.3%）で、“agree”および“disagree”を押さえて一番多くなっている。また、他のユニットと比べても“agree”の回答数が一番低く、6つの中で最も人気の低いトピックになっていると言えよう。

図4 「トピックは面白いと思う」に対する賛否のユニット毎の比較



ユニット1は「LINE、やってる？」というタイトルで、2014年秋学期に入れ替えたトピックである。過去の調査（宮内 2015 他）においては、人気の高いトピックであったが、今回は人気を集めることができなかった。人気が低くなった原因として考えられる理由は2つあり、一つは、今回の調査においてデータ数が15名と少なかったこと。もう一つは、SNS（ソーシャル・ネットワークサービス）の特性である。

最初の理由に関して言えば、春学期は秋学期からの延長学生が多く、レベル6のクラスも4クラス程度成立するのだが、今回データを収集した秋学期においては約半数程度の学生数になってしまうのが本校における現状である。データ数が少なれば少しの偏りが大きく結果に影響してしまうが、学生との教室内外での対話から今学期はSNSにあまり関心のない学生が多く見られ、その傾向が結果に影響したと考えられる。

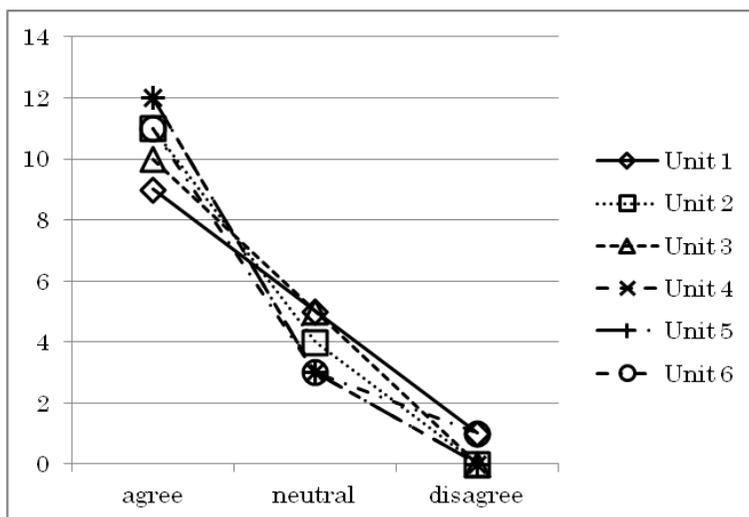
そして、SNSが世界的に広がっている現状においてはLINEが学生にとって目新

しいものではないことがもう一つの理由ではないかと考えた。確かに LINE は留学生にとっては日本に来て初めて体験するアプリで、最初は日本人とのやりとりで戸惑うこともあるかもしれないが、同様のアプリは WhatsApp や KakaoTalk、Messenger、Snapchat など日本以外の国でも広く普及しており、インターネット世代の今の大学生にとっては、特別に目新しいものではなくなっている。そういう状況においては、あえて日本語で議論する対象として見られなくなっているのかもしれない。

ユニット 5 が夏季休暇中に改定を行った新ユニットである。新しいユニットのタイトルは「関西は好きですか？」で、関西弁や関東と関西の文化・習慣の違いということを扱ったトピックである。本校は大阪にあり、日本人学生の多くが関西弁を使っており、また、留学生のホームステイ先においても関西弁が使用されていることを考えれば、学生たちが関西弁に触れる機会が多く、関西弁に対する関心の高さが予想された。そして、結果はその予想に違わず全 6 ユニットの中で一番の人気の高さとなった（回答者 15 名中 14 名が “agree” : 93.3%）。「今後取り上げて欲しいトピック」のコメントに対しても「もっと関西弁について」や “more more detailed Kansai-ben!”（原文まま）などの意見が見られ、学生が関西弁に対して強い関心を持っていることが伺えた。この結果から、今回の改訂プロジェクトで「関西」を取り上げたことは成功であったと言えるであろう。

図 5 は、ダイアログの内容の良し悪しについてのユニット毎の評価の結果である。図 4 の質問と比較してみると、これは、言ってみればダイアログの品質の良否に関する質問である。質問は、「ダイアログの内容はいいと思う（The content of the dialogue is interesting）」に対して、先程と同様に 5 段階で答えたものである。ここでも、どのユニットにおいても “agree” が “disagree” を大幅に上回っていることが見て取れる。

図5 「ダイアログの内容はいいと思う」に対する賛否のユニット毎の比較



さらにこの項目では、前段の「トピックに対する面白さ」で見られたようなユニット1に対する“neutral”が“agree”を上回るといった状況は見られず、「内容はよい」に同意する学生が9名（60%）で“neutral”（5名：33%）と“disagree”（1名：6.6%）を押さえて一番多いという結果となった。トピックに対する関心は高くなくてもダイアログの内容は良いと判断されていることが見て取れる。これは、学生が興味・関心だけで教科書を判断しているのではなく、その品質についてもある程度正當に評価しているということの証左となっている。

また、改定されたユニット5について見てみると、“agree”が12名（80%）で“disagree”と答えた学生は誰もいなかった。このユニットについては、先の「トピックに対する面白さ」の評価だけではなく「ダイアログの内容の良さ」についても高い評価を得ることができた。この2つの観点で共に高評価を得られたことから、今回のユニット5の改定は大成功であったと言えるだろう。

最後に、今後の当プロジェクトの参考にするために、アンケートにおける「今後取り上げて欲しいトピック」を見てみる。表1が、そのコメントの抜粋である。これを見ると、「敬語」を挙げる学生が数名いて、日本語習得に対する意欲的な姿勢が伺われる。また、「関西」および「関西弁」をもっと取り上げて欲しいといったコメントもいくつか見られる。これも今回の改訂の影響だと思われる。

表1 「今後取り上げて欲しいトピック」(一部)

- “Travel/ Transportation”, “Housing”
- “Keigo”, “Kansai_ben”
- 「職場での会話(敬語)」、「もっと関西弁について」
- “Kansai vs Kanto”, “Keigo”
- 「敬語」
- “Japanese dating culture”, “Japanese Sports”
- 「差別」
- “more more more detailed Kansai_ben”

教える側からの観点で言えば、今回の調査の学生の意見の中には見られなかったが、ユニット2の「交通機関のマナー」が少し時代遅れのものになっているように思われた。このユニットのダイアログの中に「iPod やウォークマンのイヤフォンからシャカシャカ漏れる音、あれもうるさいなあ」というくだりがあるのだが、今ではこうした状況が電車の中で見られることはなく、多くの人がスマホを静かにいじっていることの方が多い。また、イヤフォンをつけている人がいてもそこから音が漏れるということは、技術の進歩に伴ってお目にかかることがなくなった。

以上のことを合わせ考えると、学生のニーズだけでなく、今後とも変わりゆくであろう社会情勢・テクノロジーの変化をも考慮しながら、新しく取り込んでいくトピックを検討していく必要があると強く感じられた。

参考文献

- 庵功雄・山内博之(編)(2015)『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 庵功雄(2009)「地域日本語教育と日本語教育文法—「やさしい日本語」という観点から—」『人文・自然研究』3、pp.126-141.一橋大学
- 岩田一成・小西円(2015)「出現頻度から見た文法シラバス」庵功雄・山内博之(編)(2015)『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 岡崎敏雄(1989)『日本語教育の教材』アルク
- 小林ミナ(2009)「基本的な文法項目とは何か」小林ミナ・日比谷潤子(編)『日本

- 語教育の過去・現在・未来 第5巻 文法』 pp.40-61. 凡人社
- J.V.ネウストプニー (1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 高屋敷真人 (2012)「モジュール型教材による中級後期日本語開発プロジェクト」
『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』22号 pp.119-133.
- 高屋敷真人 (2013)「モジュール型教材を利用した中級日本語会話練習—教室内と
教室外の言語活動の統合に向けて—」『関西外国語大学留学生別科 日本語教育
論集』23号 pp.131-146.
- 田中祐輔 (2015)「初級総合教科書から見た文法シラバス」庵功雄・山内博之 (編)
(2015)『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 野田尚史 (編) (2005)『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 野田尚史 (編) (2012)『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版
- 宮内俊慈 (2015)「モジュール型中級後期教科書の学生による評価」『関西外国語大
学留学生別科 日本語教育論集』24号 pp.49-69.
- 宮内俊慈 (2016)「モジュール型中級後期教科書の学生による評価 (2)」『関西外
国語大学留学生別科 日本語教育論集』25号 pp.25-54.
- 宮内俊慈 (2017)「モジュール型中級後期教科書の学生による評価 (3)」『関西外
国語大学留学生別科 日本語教育論集』26号 pp.41-62.
- 宮内俊慈 (forthcoming)「モジュール型中級後期教科書の学生による評価 (4)」『関
西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』27号
- 森篤嗣 (2015)「日本語能力試験から見た文法シラバス」庵功雄・山内博之 (編)
(2015)『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 山内博之 (2009)『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房
- 劉志偉 (2015)「学習者から見た文法シラバス」庵功雄・山内博之 (編) (2015)『デ
ータに基づく文法シラバス』くろしお出版

(mtakayas@kansai.ac.jp)
(smiyauc@kansai.ac.jp)